

# 帯に関する研究 (第1報)

——越原家所蔵の帯について——

豊田幸子・神谷利賀

## Studies of the Sash (I)

Sashes Owned by the Koshiharas

Sachiko TOYODA and Rika KAMIYA

### 緒 言

衣服の起こりは紐のような帯を身につけることから始まったといわれ、帯は世界に共通な衣服の一種として、古代から現代まで各民族に種々の目的、方法で使用され続けている。ことに和服における帯は、袖と共に服装美の中心をなすものであって、着装の上からも省略することのできない重要な衣服の一つである。和服の女帯の変遷は、埴輪にみられる日本上代衣服の上衣と下衣の裳をささえるために用いた紐のような帯から、今日の装飾性豊かな袋帯、名古屋帯、半幅帯に至るまで、さまざまな種類が見られる。

名古屋女学校（現在の名古屋女子大学、同短期大学部、同高等学校、同中学校、同幼稚園）創立者の一人である越原春子先生（1885～1959）が、学園創立の大正4年の頃、1本の昼夜帯から2本出来る軽便で経済的な帯を工夫して着用されていた。大正9年、中村呉服店（後オリエンタル中村—現名古屋三越）に入社した小沢義男氏が外商店員として学園に出入りして、この春子先生の新しい帯に着目し、京都の織屋で作らせ、名古屋女学校の“名古屋”をとって、“名古屋帯”と命名され商品化されたのが、大正13年であった。以後、この簡便で経済性のある名古屋帯は全国に広まり、服飾史上の一大革命であったといえよう。しかし、自分のために工夫した帯が企業の手へ渡って大きな流れを描いていた大正12年頃、春子先生は、もう洋装にされており、その着こなしはまことに鮮やかで、春子先生の近代的で気品のある美しさは、当時名古屋で評判だったといわれている。その後、戦争の前後の時代にはモンペ姿であり、晩年には和服にかえられ、その帯は名古屋帯よりさらに前進した簡便な作りつけの帯であった。

本報では、越原春子先生が独自に考案して製作し、愛用された付け帯11点が現在越原家に残されており、これの構成寸法及び、実物写真を記録し、付け帯を着装させて考察の機会を得たので報告する。

### 方 法

調査時期は昭和60年4月～62年9月に行った。付け帯11点を実測し、平面図作成、また、ボディに着装させ、お太鼓結びのバランス及び、簡便さを把握した。

### 結 果 及 び 考 察

11点の付け帯は、名古屋帯の形態であるお太鼓と胴からなりたった形式のもの10点と半幅帯

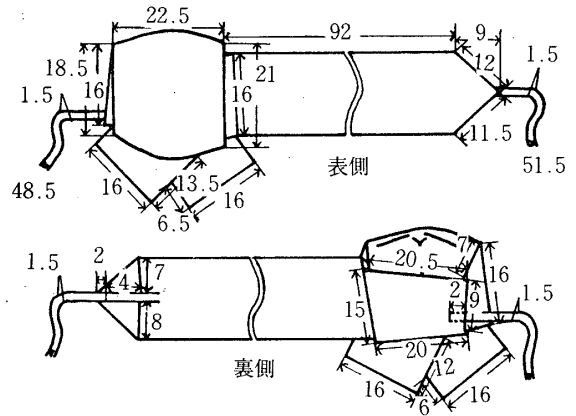
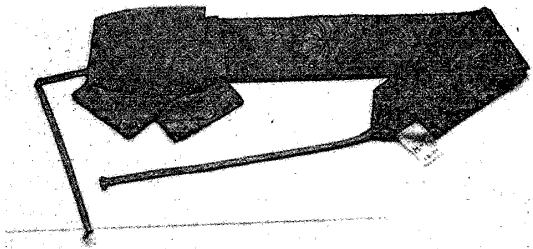


図1 資料1の写真および構成寸法

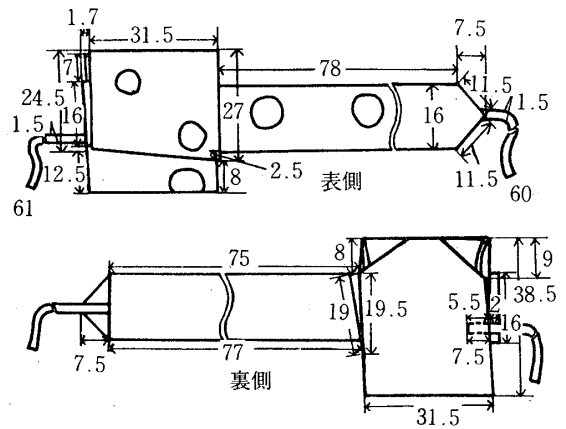
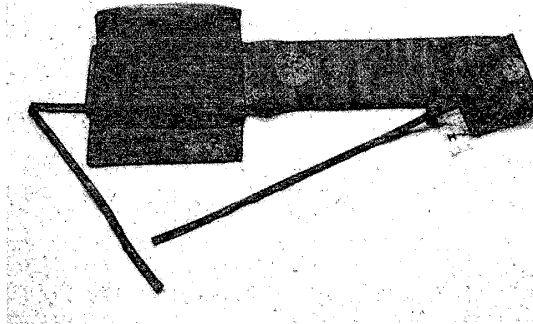


図2 資料2の写真および構成寸法

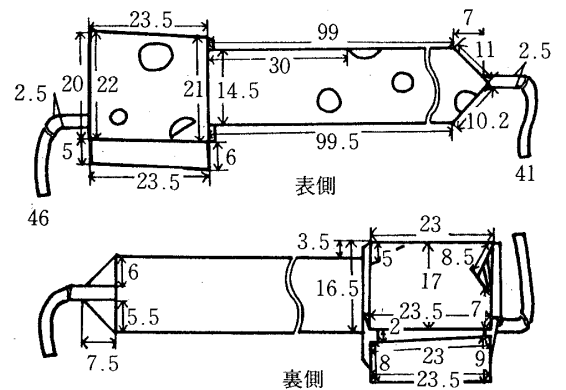
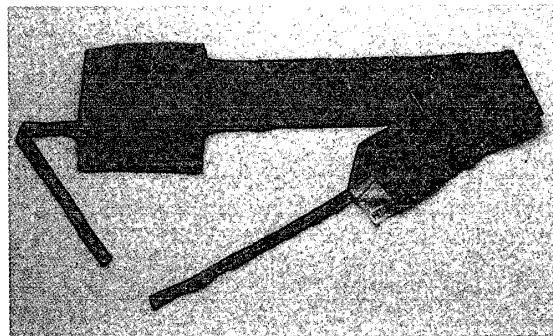


図3 資料3の写真および構成寸法

の形式1点に大別され、さらに構成、機能の面から4種類に分けられる。

第1類は帯地と帯芯によって構成される縫い帯であり、胴とお太鼓の部分がつながった形式の付け帯である。図1の資料1から図5の資料5までの5点がこの形式である。図1の資料1は貝の口結びを変形させた結びで、お太鼓部分の帯幅は約23cmと狭く普段着用であったと思われる。素材は絹の薄い生地だが、胴の部分は厚い芯と帯地で裏打ちがしてあり、一重巻きの軽

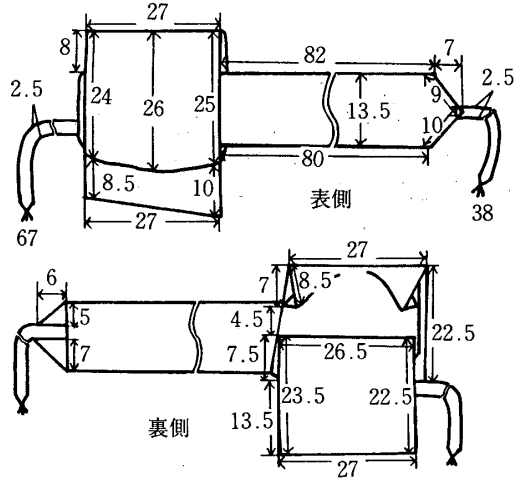
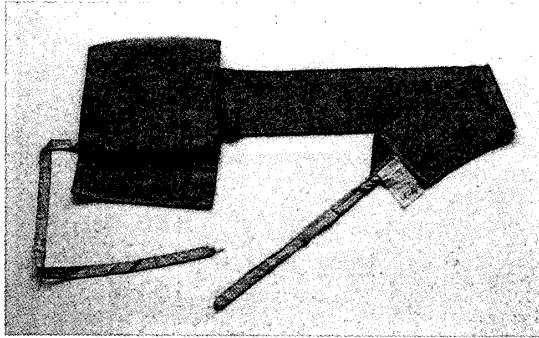


図4 資料4の写真および構成寸法

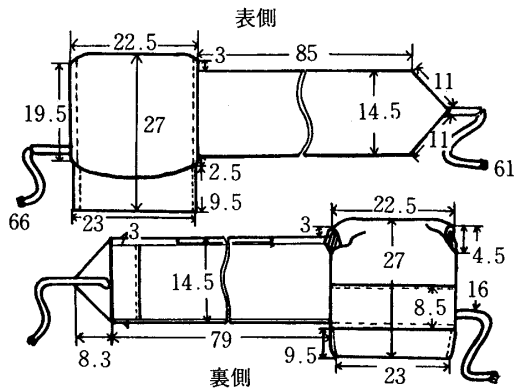
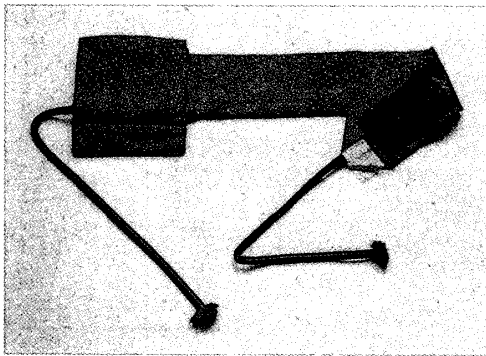


図5 資料5の写真および構成寸法

さを感じさせないように仕立てに配慮がされている縫い帯で、お太鼓の部分には別布で綿をくるんだ帯枕が入り、自然な丸みが出されている。帯の両端には帯と同系色の帯じめが2つに切って付けられており、帯の着装には使い易く、丈夫であると考えられるが、長さは約50cmで短く、先端の房がカットしてあり、帯じめとしての利用はされないものと思われる。図2の資料2のお太鼓は幅31cm、長さ27cmと他の帯に比べて一番大きく結ばれており、帯枕も厚いものが入り、お太鼓の上部の形も自然に身体になじませてある。胴の部分も60cmの長さに前板の厚紙が入り、一重巻きではあるがしっかりと結び上げることができ、付け帯を感じさせない風格である。また、帯と共布の紐が付けられている。図3の資料3の縫い帯は、帯地の織り込み柄を切り抜いてバランスよくお太鼓と前帯の部分にアップリケがしてあり、手作りの良さが感じられる。お太鼓の幅23cm、長さ25cmとやや小振りに作られているが、前板、帯枕を入れて、しっかりと仕立てられているので、他に小物の必要がなく、簡単に手早く結ぶことが出来、結び上がりも柔らかいふくらみが自然に出ている。図4の資料4の縫い帯は、資料2につぐ大きめの堂々とした作り帯である。塩瀬風の張りのある縫い帯地で作られているので、平面的に見えるが、帯枕を入れて結んでみると、自然な丸みと厚みが出てくる。お太鼓は幅27cm、長さ35cmの大きめではあるが、帯地の色が明るいので重い感じはなく、帯揚げや帯じめを結ぶことによってお太鼓がさらに安定する。図5の資料5はお太鼓の幅22cm、長さ20cmと小さめに作られてい

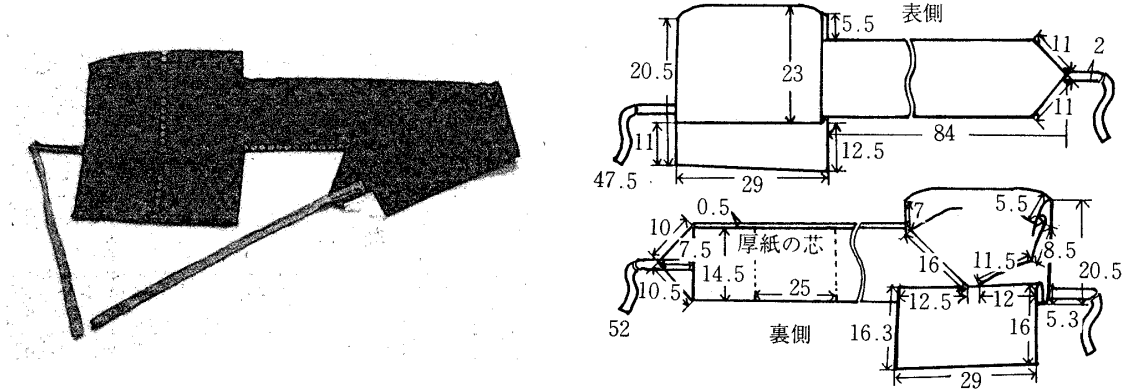


図6 資料6の写真および構成寸法

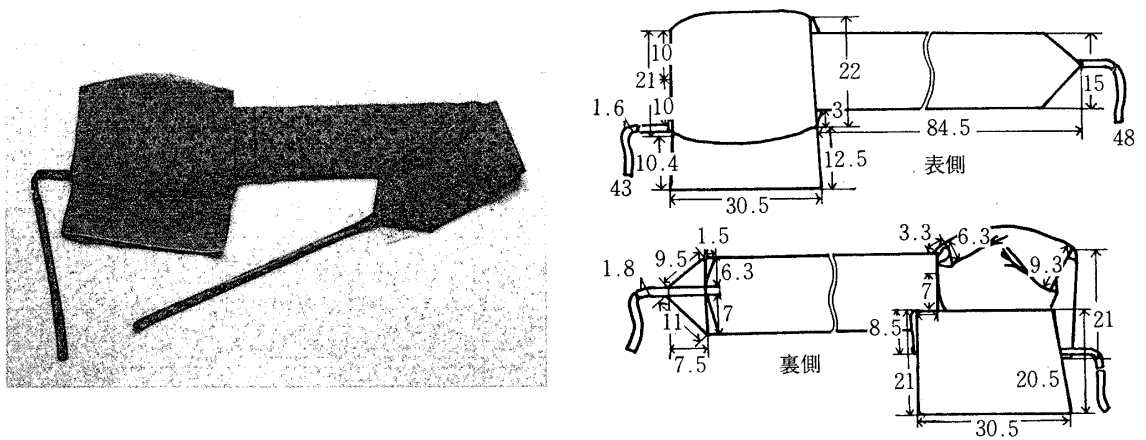


図8 資料7の写真および構成寸法



図7 資料6の着装(昭和30年, 70才)



図9 資料7の着装(晩年)

るが、お太鼓の部分には別布で芯を包んだ帯枕や、しっかりとした厚みの前板がとりつけられている。紐は帯じめを半分の長さにしたものがつけられており、胴回りの上に結べば、帯じめの用をなしている。実際に着装してみると、お太鼓の部分を後側におき、胴回りを一卷きして紐を結ぶという手軽さである。帯が軽いという点で着装して苦しくなく、便利な帯である

と思われる。

第2類は、帯地が単帯の素材であり、構成は第1類と同じく、お太鼓と胴の部分がつながった形式の付け帯である。図6の資料6から図11の資料9までの4点がこの形式である。図6の資料6の帯は図7の紋付きに着装の写真があるもので、1本の綴帯地から、この付け帯と図14の資料11の羽織下帯の2本を作られたものと思われる。お太鼓・手・胴回りすべてが1つになっているので、お太鼓・手の位置が自然に決められ、たいへん簡単に着装できる。その際に体

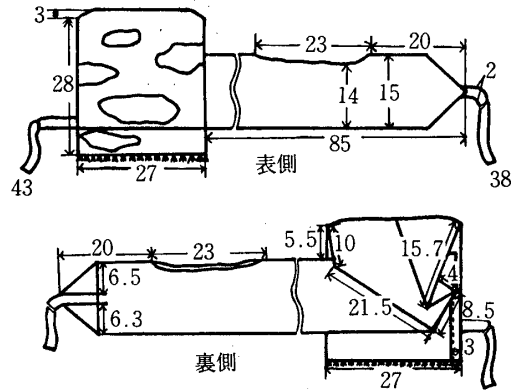
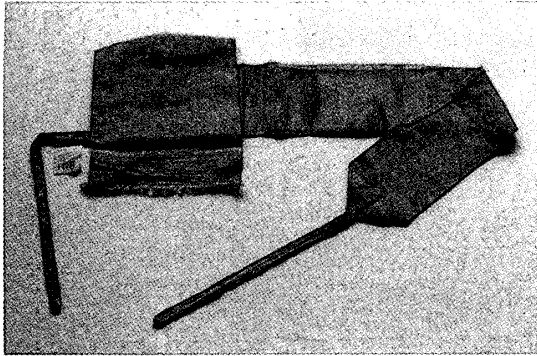


図10 資料8の写真および構成寸法

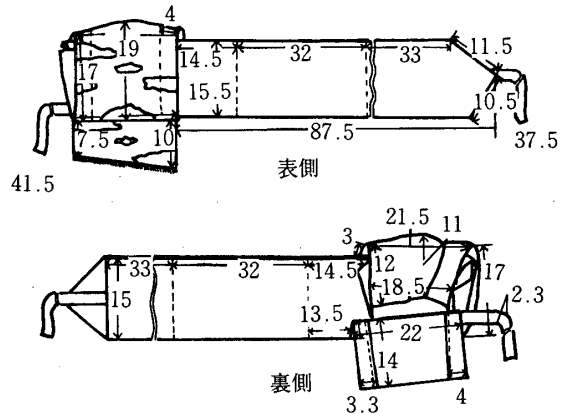
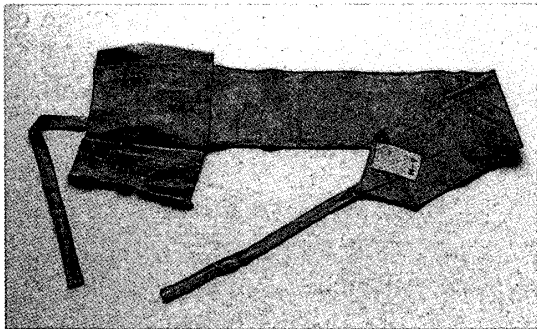


図11 資料9の写真および構成寸法

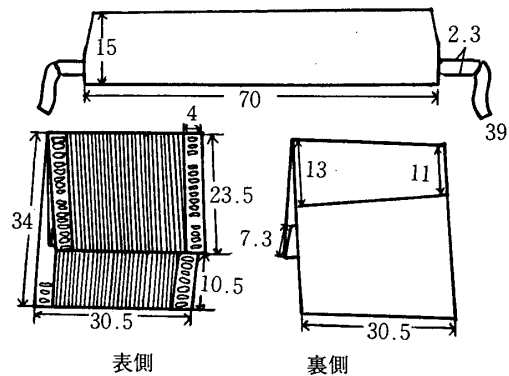
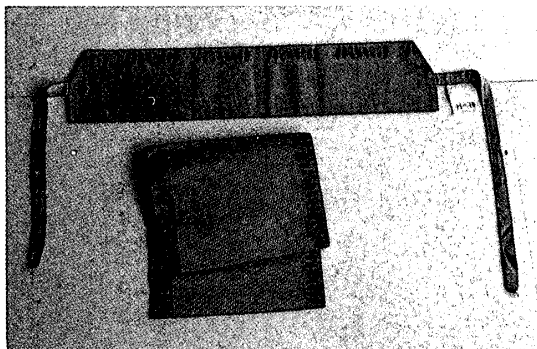


図12 資料10の写真および構成寸法



図13 資料10の着装(昭和25年, 65才頃)

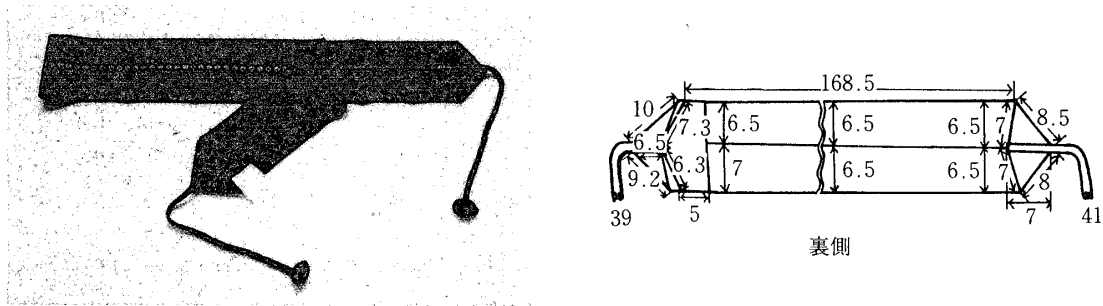


図14 資料11の写真および構成寸法

にフィットするのは、作りつけの前板や帯枕が入っているからではないかと思われる。また、お太鼓上部に傾斜がつけられ、着装してみるとその傾斜や帯地のしわづけがたいへん生きてきて、美しいバランスに構成されている。図8の資料7の帯は、模様入りの綴帯地で作られており、図9に晩年の着装写真がある。この帯も単帯であるが、芯地として厚紙にさらしを巻いた前板が約85cmの胴まわり全体にとじつけられているので、帯自体が一重巻きにもかかわらずしっかりと、見た目にもすっきりしている。また、お太鼓部分には帯枕が入っており、厚みがたいへん自然で、お太鼓の上の部分の傾斜もよく、美しいバランスに構成されている。図10の資料8の帯は、図11の資料9と同じ素材であり、1本の単帯から2本作られたものと思われる。この帯は、お太鼓と胴が一体となっているもので、あらかじめ足付き枕が入れてあり、お太鼓に丸みが作られている。夏帯であるために、胴の部分が85cmの長さで一重に巻いて、紐を結ぶようになっている。お太鼓部分に入れられている足付き枕は、あまり厚くないのもので、普段に着装する帯には適していると思われる。図11の資料9の帯は、資料8と同じ素材の単帯であるが、お太鼓部分で両端が折ってあるために、幅で5cm小さく仕立てられている。お太鼓部分には、薄い帯枕が入っているため、結ぶ時には、小道具の必要がなく手軽である。お太鼓の上の丸みが微妙につけられ、着装してみると体の線によくなじむものと考えられる。

第3類は、単帯の素材で、お太鼓の部分と胴の部分に分かれた形式である。図12の資料10の1点がこの形式である。図12の資料10は、胴とお太鼓に分かれた博多織の付け帯で、前帯の部分の長さも70cmと短いために重なり分が少なく、夏には涼しく、手軽に工夫されている。お太鼓が垂れに対して右上がりになるように作られている。垂れは、標準よりも長めで、ちょう

ど臀部を覆う形になっている。また、この帯を装着して学長室に居られる写真が図13にある。

第4類は、お太鼓がなく、胴回り部分のみの伊達帯の構成である。図14の資料11の1点がこの形式である。資料11の帯は胴回りの長さが168cmあり、端には帯じめを切ったものが31cmの長さでつけられている。この構成寸法から考察すると胴は二重に巻き、31cmの紐では後でひと結びするのみで、前の部分で帯じめとして結ぶ長さはないと考えられる。お太鼓部分がないので、羽織下用の帯として、さらに手軽に装着されたものと思われる。

## 要 約

越原春子先生が製作し、着用された付け帯11点の計測及び装着を試みた結果、構成と機能の面から4種類に分けられる。第1類は帯地と帯芯によって構成される縫い帯で、結びつけたお太鼓と胴の部分がつながった形式である。第2類は単帯の素材で、同じくお太鼓と胴の部分がつながった形式である。第3類は単帯の素材で、結びつけたお太鼓と胴の部分に分かれた形式である。第4類は単帯の素材で、胴の部分だけの形式である。

縫製の面では、お太鼓の部分は厚紙と綿を含ませた帯枕が入り、裏面の平面図で見られるように、細かくタックが入って、お太鼓の上部に自然な曲線が出されている。胴の部分も、前中心の所には前板に相当する厚紙が入り、たいへん丈夫に縫製されている。

着物を着用させたボディに付け帯を装着させた結果、お太鼓部分の形が作りつけてあるので、胴の部分を一巻きして、帯の両端につけられた紐を結びつけるのみで帯結びは完了し、その後装飾として帯揚げと帯じめを結び加えればよいことが把握できた。このように洋装のベルトをする要領で、ワンタッチに帯結びが出来る簡便さと、それぞれの帯地に合わせたバランスの良い構成寸法と丈夫な縫製に、あらためて春子先生の偉業を認識する次第である。さらに現代の和装にもこの簡便な付け帯を受けついでゆきたいと考える。

終わりに、名古屋女子大学学園長越原一郎先生には、本調査に際し、貴重な資料を提供いただきましたことを深く感謝いたします。

## 参 考 文 献

- 1) 学園七十年史編集委員会：学園七十年史春嵐，47～50，306，456，越原学園・名古屋女子大学（1985）
- 2) 坂倉園江：げんりゅう，9，12～16，源流社（1981）
- 3) 名古屋タイムズ，1967年9月30日（土曜日）
- 4) 学園報，3，6～7，名古屋女子大学中学校・名古屋女子大学高等学校（1969）
- 5) 文化出版局：最新きもの用語辞典，59～61，130，228，文化出版局（1983）
- 6) 田中千代：服飾事典，125～129，253，537，同文書院（1983）
- 7) 文化出版局：服飾事典，115，247，530，文化出版局（1985）
- 8) 服装文化協会：増補版服装大百科事典上巻，95，279～280，文化出版局（1983）
- 9) 服装文化協会：増補版服装大百科事典下巻，7，文化出版局（1983）
- 10) 装道きもの学院：きもの用語大辞典，136，222，347，主婦と生活社（1979）